

「身体拘束判断基準フローチャートを用いた身体拘束解除に向けた取り組み」

○研究の概要

ICU で集中治療を必要とする患者は、過度な侵襲を受けたことにより、重度の急性機能障害に陥っているため、高度な医療介入なしに生命が維持できない状態にあります。治療に伴い、様々な医療機器・チューブ類を装着していることが多く、身体が自由が損なわれ、意思の伝達もままならない状況にあります。当院は精神疾患を有する患者を多く受け入れており、患者の既往歴や他病棟での入院の経過から、鎮静剤の使用であっても安全帯を使用していることがみられています。毎日身体拘束についてのカンファレンスで評価はおこなっていますが、看護師は突然の危険行動というリスクに備え、予防的に身体拘束を継続することが多く、身体拘束の3原則に対する意識も低い現状があることから身体拘束実施期間が長期化している現状があります。長期間の身体拘束により、身体的・精神的・社会的弊害が生じ身体拘束が身体拘束を生む悪循環が生じます。今までチューブ類の自己抜去歴がなくても身体拘束を装着した患者、自己抜去歴があるが身体拘束を行わなかった患者がいましたがなぜそのような評価・対応となったのか振り返ることができていませんでした。今回の研究では、身体拘束の使用患者に対して入室中の身体拘束解除ができた要因とできなかった要因を明らかにすることで、介入できる看護を見出し、予期せぬチューブ類の自己抜去による患者の生命の危機を防ぎ、身体拘束を最小化とすることで苦痛の減少やPICS(集中治療後症候群)の予防に繋げることを目的としています。

○研究目的と方法

本研究は、ICU 入室患者で、入室期間中身体拘束を解除できた要因と解除できなかった要因を明確化し解析することを目的としています。令和5年4月～令和6年3月の期間に当院ICUに入院されて集中治療を受けられた患者様の診療録と看護記録の情報をを用いて、集計や簡単な統計処理を行う研究です。研究データは、年齢、性別、身体拘束装着の有無、身体拘束を解除した時間帯、デバイス類の有無、鎮静剤使用の有無、SOFAスコア、認知症、精神疾患の既往歴、せん妄歴、自己抜去歴、個室管理の有無等であり、個人を特定可能な情報は解析に用いません。

○本研究参加について

本研究への参加・不参加に関わらず、利益・不利益が生じることはありません。個人を特定可能な情報は解析には使用されず、データは個人情報情報を削除し、匿名化した状態で取り扱います。本研究への不参加をご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。

○調査する内容

年齢、性別、身体拘束装着の有無、身体拘束を解除した時間帯、デバイス類の有無、鎮静剤使用の有無、SOFAスコア、認知症既往歴、せん妄既往歴、自己抜去歴、個室管理の有無、チーム体制などを調査します。

○実施期間

研究対象期間：令和5年4月1日～令和6年3月31日

研究実施期間：倫理委員会審査承認後～令和7年3月31日

○研究成果発表

調査した患者様のデータは集団として分析され、学会発表などされます。しかし、個人が特定されることはありません。

○研究代表者

国立病院機構熊本医療センター ICU 看護師 竹井加奈美

○当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター ICU 看護師長 出口恵美

○問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター ICU 看護師 竹井加奈美 TEL:096-353-6501